日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域

会報

Vol.25(3), November, 2021

記事

♪ 巻頭言
♪ 体育哲学考
♪ 書籍紹介
♪ 私の研究
♪ 箱根合宿報告
♪ 日本体育･スポーツ哲学会報告
♪ 日本体育･スポーツ･健康学会報告
♪定例研究会案内
♪ 事務局より
♪ 次号予告！

巻　頭　言

日本体育・スポーツ・健康学会を考える

高田哲史（元関西福祉大学）

2021 年度の日本体育・スポーツ・健康学会（旧日本体育学会）（以後，学会）第 71 回大会は，従来の専門領域別の縦割り的な研究発表の場だけでなく，はじめて領域横断的な議論の場を設定するという新しい形で開催された．学会のこの新しい取り組みで，私は高等学校の保健体育科教員をしていた頃，学会に感じていた一種のもどかしさが一体何だったのかが明確になった気がした．

私は，高等学校の保健体育科教員になったばかりの 1975（昭和 50）年（24 歳の頃）から学会の正会員となり，毎年，授業や部活動に役に立ちそうな発表を選び，各専門分科会の会場をかけ回った．自らもいくつもの専門分科会で発表を行った．当時の私にとって，学会は体育科学の最先端の情報を入手する絶好の機会であった．

しかし，会員となって 10 年を過ぎる頃から何かむなしいものを感じるようになっていた．今振り返ると，その大きな理由は学会の縦割り的な研究発表形式だったように感じる．現場で生徒を指導していた私は，実践的・応用的な学術知を欲しており，領域横断的な議論の場が必要であった．各専門分科会をかけ回るだけでは限界があった．学会とは別に，専門分科会を基盤とした学術組織が次々と作られ始め，独自に会を運営し始めた．領域横断的な議論の場はもう不可能な状態になっていた．私がどこかの専門分科会に腰を落ち着けて所属せねば，と感じ始めたのはこの頃であろう．

私は縁あって，60 歳から 11 年間大学の体育教員として仕事をした．高等学校教員の時に想像していた大学教員とはかなり違っていて，もはや大学の教員は自分の研究さえしていればよい時代は過ぎ去っており，小・中・高等学校の教員と同様に，教育（特に小・中・高等学校と連携した教養教育）をしなくてはならなくなっている．このような時代に，創設 71 年目に英断され，テーマ別研究発表を実行に移されたことは，学会が横断的な議論の場を提供したという点で大変意義ある取り組みであったといえる．

現学会の専門領域の知見をいかにして大学の体育に組み入れていくか，という論議が体育哲学専門領域ですでに始まっている．大正時代後期から昭和初期の日本においても幾人かが体育哲学の必要性を説き，体育の本質論議と，特殊科学としての体育学の構築を目指し，体育にそれらが必要なことを説いたが，組織的な取り組みには成らなかった．戦後 1950（昭和 25）年に学会が創設され，はじめて特殊科学としての体育学が確立され，専門分科会ごとに

研究発表が行われ，現在に至っている．学会が果たした役割は大変大きかったが，ただそれは専門領域別の縦割り的な研究発表の場の提供で，体育で必要な教養体育ということを考えた場合は不十分であった．

私は長く高等学校の保健体育科教員をしていたので，体育学の知見を高等学校の授業や部活動に活用しようと，学会の専門分科会会場を駆けずり回り，そこで得た知見を持って帰り，同僚教員や生徒たちに還元したことを思い出す．今回の学会で領域横断的な議論の場が設けられ，異なった専門領域の先生方が一堂に集まり（と言ってもZoomを通じてだったが）議論が出来たのは，特に大学体育の方向性を占うと明るい未来が待っているように感じるが・・・，果たしてSDGSとしての取り組みになるのであろうか．

最後に個人的な話を一つ．この『会報』が出る頃には私は学会と同じ71歳になっているだろうが，２つの理由で私はこれからも研究活動を続けていきたいと考えている．一つは，追究したいテーマがあるから．もう一つは，同じ時期（私の場合，博士後期課程在学の50歳台）に苦労した仲間たちや後輩が体育哲学専門領域で頑張っているからだ．特に後者は私が研究を続けようとする気持ちの大きな原動力となっている．研究は孤独な部分もあるが，頑張っている仲間たちがいる限り，大丈夫だ．会員の皆さん！お互いに健康には十分留意して，自分の研究・仕事に邁進しましょう！

高田哲史（takata2010phd@yahoo.co.jp）

体育哲学考

「テーマ別研究発表」と「専門領域別研究発表」を超えて

森田　啓（大阪体育大学）

9月7日から開催された第71回大会のHP「重要なお知らせ」の冒頭に，「テーマ別シンポジウム」と「テーマ別研究発表」をプログラムの中心にする，と記載されている．しかし，専門領域別発表（以下：領域別）の本領域は1件のみ（申し込み2件）だったことに危機感をいだく声も聞かれた．夏期合宿研究会でも意見交換の企画が立てられ，この問題について議論された．

前回の第70回大会（慶應義塾大学）において，テーマ別研究発表（以下：テーマ別）へ向けた新しい取り組みとして「領域横断セッション」が開催された．発表形式はポスターのみで全部で54題の発表があった．，私は「オリパラ」「トレーニング」と並んで3つ設定されたテーマのひとつである「大学生」で，「大学体育」に関する内容を発表した．小中高大の体育・保健体育を大学生が批判的に考察した学習成果に関する内容であった．他領域のこれまで面識のなかった多くの人とディスカッションできてとても有意義だった．本領域からの発表は非常に少なかったが，「ポスター」という発表形式が影響したのだろうか．以前勤務していた工学系の大学では，学内のFDや研究会などすべてポスター形式だったため，私はポスター発表に抵抗はない．ポスターに書ける情報量は限定されるし，口頭発表に相当する説明をする時間はないが，興味をもってくれた人に解説し，ディスカッションすることは有意義だし，何よりやり取りできる人数が圧倒的に多い．私は数年前に誤って本領域のポスター発表に申し込み（本領域ではポスター発表はない記載はあったが，口頭発表を選択する必要があったようだ），ポスターなら他領域でやれと言われたことがあったが，本領域の研究は，原稿読み上げでも，資料提示でも，ポスターでも，多様な発表形式に対応できると思う．

今回はテーマ別の「学校保健体育研究部会」で，前回の領域横断セッションの内容を発展させて発表した．また，前回の発表に興味をもってくれた人にも共同研究者に加わっていただき，共同研究者は6名（本領域以外5名）で行った．発表後の質疑で座長と本領域以外のおひとりから質問をいただいた．その後，本領域のおひとりからも電話でコメントいただいた．対面であれば会場でもっと多くの方からコメントをいただけただろう．ポスターだった

らさらに多くの人とディスカッションできたと思うと残念である．今後テーマ別でもポスター形式を選択できることを期待したい．

夏期合宿研究会での意見交換会では，オンライン開催だった今大会で本領域へのアクセスが多かったことが報告されたが，対面だったらどうだっただろうか．おそらくこれほど多くはないだろう．また，テーマ別でも領域別と同じような質疑になり，それに対して他領域の人が本領域に興味・関心をいだいた事例が報告されたが，当然，その逆もある．テーマ別と領域別の選択は個人に委ねられており，研究の目的によっていずれかを選択することになる．結果として領域別が少なかったとしても「体育哲学は不要」といわれたり，学会内における本領域の位置づけが下がったりすることはないだろう．元来，私たちはテーマや専門領域を超えた研究をめざしている．テーマ別であれ領域別であれ，「おっ，体育哲学やるなぁ」と思われるように取り組めばよい．学会の内側（他領域）への視線だけでなく，学会の外側（他学会や社会）への視線も必要だと思う．

本領域の特徴の一つは，現状に対して批判的に思考(critical thinking)することであろう．つまりノリが悪いこと【千葉雅也『勉強の哲学』】である．私も批判的思考を大切にしてきたつもりである．当然，本学会の「テーマ別を中心」に対しても批判的でよい．さらに従来の体育哲学そのものに対しても批判的でよい．ポスター発表，大人数の共同研究，どちらも本領域で取り組んでいいはずである．哲学 philosophy は愛 philos と知 sophia からなるギリシア語に由来し，知を愛することである．関根正美代表が述べているように「哲学は専門家に独占される専門知に限らない」【会報 Vol.25 (1)】．私は，今回の発表のように，他領域の人も体育哲学の研究に巻き込み，専門領域を超えた体育哲学の研究を続けていきたいと考えている．

森田　啓（hirakumorita@ouhs.ac.jp）

書籍紹介

諸隈元『人生ミスっても自殺しないで，旅』（晶文社，2021 年 7 月）

松田太希（暴力問題相談センター）

徹底された哲学というものは，哲学研究者による引用・参照というしぐさを無粋なものにしてしまうほどの高潔さがある．そのことに気がつかずに（？），彼ら亡き後，その解釈をあらそっているのは，見方によってはずいぶん滑稽な光景である．だが，やはり徹底された哲学ほど魅力的であり，多くの人々をひきつけ，滑稽な取り扱いを受ける運命にある．師の孤独を知る弟子は少ない．

『人生ミスっても自殺しないで，旅』は，著者・諸隈氏が，自殺を決意して向かった欧州旅行の記である．本書ではヴィトゲンシュタインが所狭しに登場する．氏は「熊の結婚」という小説で文学賞を受賞している．その小説観の背景には，ヴィトゲンシュタインがいる．「完全小説論考」という小説もまた，氏は発表している．諸隈氏のヴィトゲンシュタイン知識と理解は，その Twitter アカウント（@moroQma）で毎日呟かれている．どんな話題にもヴィトゲンシュタインで．その手際は驚異的である．「ヴィトゲンシュタイン情報蒐集家」が諸隈氏のもう一つの肩書である．

この旅行記は諸隈氏の旅についてのものだが，読んでいて，その叙述が諸隈氏の視界からなのかヴィトゲンシュタインのそれからなのか，ときどき判然としなくなる．例えば．

言葉が解らない外国のレストラン等に独りで入り，そこでの正しい振舞い方が解らない時どうするか．客の動静をしばし観察するのがセオリーだ．いや，セオリーではない．断じて「理論」ではない．「理論に価値はない」「それは私に何ものも与えない」などと独り言を言いながらカウンターに近づく．これは独り言ではなく，1930 年 12 月 17 日にヴィトゲンシュタインがウィーンの自宅で，一時は共著を出す計画もあった F.ヴァイスマンという筆記

者に実際に言った台詞なのだが，今それは僕にとって興味がない.「それは私の探しているものではない」などと言いながら席につく.（243 頁）

こうした調子の文章が，最初から最後まで駆け抜けていく．この諸隈氏の文体に苛立つ哲学研究者は少なくないのではないか．そんな想像をしながら，哲学研究者たちの或る意味では非常に偏った姿勢を窺い知ったような気分になった．つまり，「ヴィトゲンシュタイン」といった哲学者の名や「哲学的紀行エッセイ」といったキャッチを見た途端に，なんらかの哲学的主張を期待しながらそれらに近づき始めるあの姿勢だ.

もちろん，哲学者たちが大切な言葉を遺したことは言うまでもない．だが，少なくともヴィトゲンシュタインとニーチェ（この二人が諸隈氏はお気に入りとのことだが僕も同じだ）に関わるとき，彼らが述べていることは非常に徹底されていて，我々による引用・参照をほとんど拒んでいる．登り終えた梯子は外されなければならない！のである（という梯子拝借…）．ほんの少し油断しただけでも，彼らの言葉の提示の仕方を我々は誤る．それほどまでに繊細・微妙なものが，彼らにはある．諸隈氏の独特の文体はそのことへの配慮の結果だと，僕は了解した.

ヴィトゲンシュタインはカントを「偉大」と評し，その哲学が示さんとすることには敬意を払ったが，それを「物自体」や「総合判断」などという特殊な用語で語ることには否定的だった．そうした日常言語を逸脱したジャーゴン（中略）の使い回しが，何ら実態のない観念を人心に植え付け，身体にまで根を張らせて人を虚構の世界に縛り付け，結果的に哲学を問題解消の手段ではなく，マッチポンプ的に問題自体の火種にして来たというわけだ.（271-272 頁）

学会の変革に向けた動きがなされているが，哲学（学問）への向き合い方についての根本的な省察が，そこには伴われるべきである.「哲学」ということで我々はいったい何をやってきたのか？ヴィトゲンシュタインやニーチェをはじめ，哲学（者）については多くを知っているかもしれない．では＜世界＞については，どこまで何を知っているのか？引用・参照というしぐさで何か非常に大切な部分を削ぎ落としてはいないか？研究・論文の顔をしたマッチポンプをつくった覚えなどないと言い切ることができるのか？諸隈氏とヴィトゲンシュタインの一体さ，そして，そこから出てくる特徴的な文体をめぐって，そんなことを思った.

松田太希（taiki-matsuda.phd@outlook.com）

私の研究

あなたの専門は？

広瀬健一（法政大学）

研究者としての専門を聞かれると緊張します．通常，研究者が専門を聞かれた場合，特定の学問領域を答えるのが一般的です．しかし，自身の興味が先立ち，それについて研究を行うスタイルを貫いてきたため，これといったディシプリンを持たないまま学位を取得してしまった私にとっては，この質問への回答は非常に難しいものになります（とはいえ，こんな人間を温かく見守ってくれた筑波大学陸上競技コーチング論研究室の先生方には感謝申し上げます).

私は「ハンマー投におけるレジスティッドトレーニングの特性およびトレーニングの有効性の検討」というタイトルで博士論文を執筆し，2017 年 3 月に博士（コーチング学）の学位を取得しました．博士論文では，陸上競技のハンマー投選手に対して，2 つのトレーニング方法を試し，力学・工学の手法を用いてその効果の検討を行いました．その結果，特定のト

レーニングを行った選手群は，統計的に有意なパフォーマンスの向上が確認されました．この結果によって，ハンマー投選手に有用なトレーニング方法を提案した研究として認められ，博士号を取得しました．この研究を完遂させるためには，スポーツバイオメカニクス，トレーニング学，統計学の知識が必要でした．当時は必死に勉強し，論文を執筆したのですが，執筆過程において，とてつもない能力を持っている方々に出会い，私などどの分野においても専門家と言えるレベルには程遠く達していないと感じていました．

博士論文の執筆過程において，私はスポーツの実践現場にて，研究で得られた知見を適用する際に，ある選手には効果的な一方で，ある選手にはそうでない事例に数多く遭遇しました．現場というのはそういうものだ，しょうがない，という気持ちと，知見を選手に言葉で伝える過程の中に，一筋縄に説明できないような何かがある（はずだ）という無根拠な確信を当時感じ，これを研究にできないものだろうか？という気持ちの中で揺れ動いていました．このことを明らかにするために，例えば，指導者の言葉を調査によって収集し，それを分類，類型化することで指導のために有効な言葉を選定する，といった実証的な研究も可能であると当時は考えました．しかし私が疑問に思っていたのは，「指導者の言葉は選手にどのように作用するのか？もしくはどのような理由で作用しないのか？」「言葉によって運動をどのようにして学ぶのか？もしくは学ばないのか？」という点でした．それは実験や調査から得られた研究成果では満たされない「何か」を含んでいるように思われました．

この言葉という掴みどころのない対象にどのように接近すればよいのかと悶々と日々を過ごしていたところ，野家啓一著，『言語行為の現象学』という本に出会いました．読んでみてもさっぱりわからなかった，というのが本当のところでした．しかし，言葉のさっぱりわからない側面に興味を持った当時の私にはちょうどよかったのかもしれません．この本の請求記号は 800 番台でこれは言語学に分類され，哲学的な議論が展開されていました．私は，スポーツの実践現場における言葉に対して，言語学・哲学の方法を用いることによって，研究することができるのではないかと感じました．それ以降，体育・スポーツ哲学の先生方にアドバイスを頂きながら研究生活を続けています．特に筑波大学の深澤浩洋先生には，いきなり研究室にお邪魔し，指導場面の言葉に対して，私の頭で説明できるレベルの稚拙な考えを吐露したところ，「哲学できていますね」とお言葉を頂いたことは体育・スポーツ哲学の領域で研究生活を送るための大きな一歩となりました．

以上，私の研究歴を振り返ってみますと，運動の「教える―学ぶ」の営みの中で発生する何かを対象にした研究であることは共通しているように思われます．私の研究は，方法論の次元ではなくテーマに共通性があるのだ，と最近は自身に言い聞かせています．そのような折，2021 年の体育・スポーツ・健康学会にて，テーマ別の研究への取り組みがなされるようになりました．私もこの潮流に乗じて，歩を進めていきたいと考えています．

広瀬健一（kenichi.hirose.68@hosei.ac.jp）

箱根合宿報告

箱根合宿研究会 2021 参加報告

唐澤あゆみ（日本体育大学大学院）

初めての 9 月開催が，奇しくも新型コロナウイルスの影響で初めてオンライン開催となった体育哲学専門領域夏期合宿研究会に，私は初めて大学院生として参加し，初めて小報告をしました．本研究会には，私がまだ東海大学 4 年次生であった 2017 年度に初参加，同大学の職員であった 2018・2019 年度にも続けて参加しています．静雲荘の娯楽室で，夜遅くまで議論を交わす先生方と大学院生の真摯に研究と向き合う光景をつい昨日のことのように覚えています．オンライン開催ではあったものの，いよいよ「大学院生」として本研究会に臨めることを心待ちにしていました．

小報告を準備し始めてまず直面したのは，学部の卒業論文を執筆した際にも感じた「書き

たいのに書けない」という感覚でした．Word 上に打ち込んでは消し打ち込んでは消しを繰り返し，本研究会 2 日前になってもほんの数行の稚拙な文章があるだけでした．そのような私の小報告にも，どこを重点的に先行研究の検討をしていくか，どのように焦点を絞っていくかなど研究の進め方をご教示くださった先生方に感謝を申し上げます．

今年度は研究発表だけではなく企画も豊富でした．研究会企画②「『東京 2020 大会』を統括する」は，オリンピックをキーワードに研究していきたいと思っている私にとって非常に勉強になりました．舛本先生にご指名いただき，「私も選手村にいたが，選手村内の写真撮影が禁止されており，草の根レベルでの平和活動等は難しいと感じた」と述べたところ，舛本先生より「東京 2020 大会組織委員会のフィロソフィーが全くなかった」と鋭いコメントを頂きました．私が考えているはるか先の問いや意見を持っていないと，充実した研究はできないと気づかされました．その他，Zoom 懇親会もあり，静雲荘の娯楽室のような盛り上がりがあったと聞いています．（私は参加できず非常に残念です．）

オンライン開催であるからこそ気がつくこともあります．それは，やはり人間の性は（もしかしたら私だけ？），「ないものねだり」ということです．有意義な研究会であったのにも関わらず，コロナ禍前のように一堂に会して実施したいという思いがありました．どこか，「箱根！自然！温泉！」というように研究会の中にも非日常性を求めていたのだと思います．全国どこでも家からでも参加できるのはオンライン開催のメリットです．しかし，今回私は家から参加した際に，「研究会が終わったら洗濯物まわさないと・・・」など日常から乖離できないもどかしさも感じていましたがありました．あれこれ考えずに研究会に集中できる環境に身を置けることが，対面で開催する良さの一つかもしれません．新型コロナウイルスの収束も終息も全く見当つきませんが，また箱根で，いよいよ太陽山荘で，皆さんにお会いして非日常の中で本研究会を楽しめる日が近いことを心から願っております．

最後になりましたが，本研究会の世話人である東海大学の大津克哉先生をはじめ，本研究会開催・運営にご尽力いただいた先生方に感謝を申し上げます．

唐澤あゆみ（21pma24@nittai.ac.jp）

体育・スポーツ哲学会報告

オンライン学会からオンサイトの研究発表会をとらえ返す：日本体育・スポーツ哲学会第 43 回大会を終えて

髙尾尚平（日本体育大学）

日本体育・スポーツ哲学会第 43 回大会が 2021 年 8 月 28 日（土），29 日（日）に開催された．本学会大会は，昨年度と同様に，Zoom を用いたオンライン方式で行われた．本学会大会では，12 題の一般研究発表に加え，1 題の招聘基調講演，2 つのシンポジウムが行われた．そのなかには，許立宏先生（國立台湾体育運動大学）と胡天玫先生（國立臺北教育大學）のご発表が含まれおり，国外の研究者により発表がなされた点は印象的であった．また，2 つのシンポジウムでは，いずれも終了時刻を超過するほどに盛んな議論が交わされ，盛況な様子が確認された．

学会大会の進行は，目立ったトラブルはなく，総じてスムースであった．とはいえ，Zoom を退室してふと我に返ったとき，オンライン学会の「スムースさ」に違和感を覚えた．違和感の所在は 2 つあったように思える．

1 つ目は，「剰余」の不在である．すでに本会報でも指摘されているように，オンライン方式の研究発表会には，なにほどかの「寂しさ」を覚える．会報 24（4）で石垣健二先生は，日本体育・スポーツ哲学会 42 回大会を振り返り，「生身の人間関係は，すべてデジタルな人間関係に置き換えられてしまうのか？」との問いを投げかけている．また，会報 25（2）で高橋徹先生は，2021 年度第 1 回定例研究会より導かれた課題として，研究発表以外の「“あいだ時間”」の確保を挙げている．いずれの指摘も，“あいだ”にかかわる問題である．問われて

いるのは，空間的な人間の“あいだ”の問題だからであり，時間的な流れにおける“あいだ”の問題だからである．オンサイトの研究発表会を顧みると，これらの“あいだ”から数多くの剰余が生みだされていたことがわかる.休憩時間でのふとした談話や喫煙所でのたむろ,懇親会や飲み会で語りだされる先達のことばなど，オンサイトの研究発表会では，意図的にプロデュースできないような学びのチャンスがさまざまな“あいだ”から生みだされていた.こうした剰余がはからずも研究活動を促進させるものであったとすれば，研究発表会における“あいだ”の確保は，憂慮すべき課題であるだろう.

その一方で，実際には,“あいだ”の有無にかかわらず，本学会大会がスムースに進行したことも事実である．このギャップに第2の違和感がある．学会大会がオンラインで代替可能なものであるとすれば，従前のオンサイトにおける研究発表会それ自体が，もとよりシステマティックなものになっていた可能性があるからである．ここでもやはり,「剰余」と“あいだ”が問題となる．従前の研究発表会は，一部の人に身のこわばりを強いるものとなっていなかっただろうか．質疑応答は，その時間設定を含め，さまざまな声が行き交う機会となっていただろうか．筆者は，本学会大会を経て，このようなことを考えていた．もっとも，今回のシンポジウムにおいて，多様な登壇者が発表を行っていたことや，終了時刻を超過するほどに議論が発展していった点は，筆者にとってホッとするシーンでもあった.

上記は，現段階では，筆者の雑感に過ぎない．だが，研究発表会がシステマティックなものとなり，冗長性や偶然性が軽視されるならば，このことは,「哲学」を標榜する私たちにとって不健康なことではないだろうか．オンラインでの研究発表会の経験は，偶然にも，既存の発表会を省察するための視界を用意しているように思える.

もとより，本学会大会が円滑に行われた背景には，釜崎太先生をはじめとする実行委員会の方々のご尽力があったことを忘れてはならない．この場を借りて，厚く御礼申しあげたい．ありがとうございました.

髙尾尚平（s-takao@nittai.ac.jp）

日本体育・スポーツ・健康学会報告

日本体育・スポーツ・健康学会　第71回大会　参加報告

奥平龍之介（筑波大学大学院）

2021年9月8日（水）9時55分，私は本学会での初めての研究発表を終えた．発表題目は,「体育授業における雰囲気と感情の関係性についての考察」であった．発表を終えたにもかかわらず，私は，悔しいような悲しいような感情に包まれた．なぜなら，私の問題意識が発表を聞いている方々に明らかに伝わっていなかったからである．発表から1か月弱経過した現在でも，その時の感情は忘れられず，これから先も忘れることのない経験になりそうである.

私にとって初参加となった日本体育・スポーツ・健康学会の，第71回大会は，2021年9月7日（火）－9日（木）の日程で，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により，同時双方向オンライン形式で開催された．また，9月13日（月）－30日（木）の期間で，テーマ別研究発表とシンポジウム企画のオンデマンド配信も行われた．今大会は，学会員の先生方はご存じの通り，日本体育学会からの名称変更後，初の学会大会であった．今大会から，これまで専門領域のみに分けられていた研究発表に，5つの応用領域部門，すなわち「スポーツ文化」,「学校保健体育」,「競技スポーツ」,「生涯スポーツ」,「健康福祉」が加えられ，これらに関する研究発表が2日間行われた.

全ての発表を聞くことはできなかったが，その中でも印象に強く残っている内容について報告したい．大会初日のシンポジウムにおいて，竹村瑞穂先生が「スポーツ科学研究における学際性の確立に向けて」という題目で発表された．そこでは，研究を進めていくにあたって，自らの経験してきた出来事や具体的な場面を忘れずに研究を進めていくことが必要で

あるという発言があった．その言葉が，非常に印象深く心に残っている．私は，哲学書を読めば読むほど，著者の論じている世界を理解することに集中しすぎてしまう．もちろん，それも必要なことであるのだが，その一方で，自らの経験してきた出来事や具体的場面を忘れてはいけない．そのため今後は，常に自らの想定する体育授業の世界と著者の論じている世界を往復しながら研究を進めていくことが必要であると感じた．

さらに，大会2日目のシンポジウムにおいて，樋口聡先生が，研究を進めていくにあたって専門性と学際性の両方を担保するために必要なこととは何か，というような趣旨の質問に対して，研究者が何かの問題を突き詰めていくと学際的にならざるを得ない，という応答をされていた．その言葉にも，自らに響くものがあった．竹村先生や樋口先生の言葉が，なぜ私に響いたのかについて内省してみると，今回の発表では，自らの発表内容はともかく，発表の仕方や発表の際に用いる言葉などに配慮することを忘れてしまっていたことに気づくことができた．その点を改善することによって，私の問題意識を他者と共有し，議論することができると感じた．今後は，自らに「内なる他者」の存在を作り上げ，その存在に問いかけ，応答することを忘れずに研究活動を進めていきたい．最後に，この場をお借りして，ご指導いただいた多くの先生方に感謝申し上げたい．

奥平龍之介（ryunosuke.okudaira@gmail.com）

定例研究会

2021年度　日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域　第2回　定例研究会（案内）

森田　啓（大阪体育大学）

日程：2021年12月4日（土）14：45～18：05

オンライン(ZOOM）による開催

注意事項：閲覧情報はメーリングリストで配信します．メーリングリストへの登録をお願いします．会員以外が閲覧する場合は，会員から研究担当にご連絡ください．また参加者は当日実施する出席調査（Google Formを予定）に記入をお願いします．

【プログラム】

14：45 代表挨拶 関根　正美（日本体育大学）

14：50 研究発表①　　水島徳彦（東海大学大学院），阿部悟郎（東海大学）

競技スポーツにおける道徳的所与と競争概念に関する検討

：カント倫理学とA.コーンの競争論議を中心として

【概要】

本発表は，競技スポーツにおける道徳的所与に関する検討を目的とする．従来の競技スポーツにおける諸研究において，競技スポーツの本質の一つとして「競争」概念が前提とされてきた．このような競争性に関する主張は，競技スポーツを行う人間本性と同一視される傾向を有する．本発表は，その前提について批判的な検討を試みる．

15：35 研究発表②　　一戸和成　（東海大学大学院），阿部悟郎（東海大学）

体育における経験という出来事の有効性に関する検討

：デューイの経験概念に基づいて

【概要】

本発表の目的は，J．デューイ（以下，デューイとする）の経験概念をもとに体育の可能性について検討することである．体育において，生徒が多くの経験をするだろう．体育における経験にはどのような可能性があるのだろうか．デューイの経験概念は，人々の内的な変

化に目を向ける．そこで，本発表においては，デューイの経験概念に着目しつつ，体育における経験の有効性について検討する．

16：20 休憩

16：30 研究発表③　　入野貴幸（東海大学大学院），阿部悟郎（東海大学）
学校体育における教育的可能性に関する検討の試み：
デューイ教育学における成長概念に基づいて
【概要】
本発表は，デューイ教育学にみられる「成長概念」に基づいて，学校体育における教育的可能性に関する検討を試みることを目的とする．身体教育（体育）の概念を総体として明らかにしようとするならば，限定詞にすぎない「身体」よりも，基底詞の「教育」に対する概念検討を考究することは，自明の理であるだろう．従って，デューイの成長概念に依拠することは，基底詞である「教育」を考究する試みの一つであり，学校体育における教育的可能性の手がかりとなるだろう．

17：15 研究発表④　　岸井 貴春（筑波大学）
大学教育における運動部活動の意味の再検討：大学スポーツから学生スポーツへ
【概要】
本発表は発表者の修士論文の内容に基づく．本研究の目的は学生主体の運動部活動がどのように大学教育に位置づくことができるか明確にすることである．運動部と体育会，そして学生連盟の密接さに鑑みると，教育と競技の二項対立に収まらない大学の運動部活動像が浮かび上がる．そして教育との関連から考察すると，正課教育（キャリア教育）と自主的活動との矛盾が示されるが，課外教育の理念を手がかりにすることで大学教育内に運動部活動を位置づける意味を見出せるだろう．

18：00 副代表挨拶　　深澤　浩洋（筑波大学）
18：05　懇親会（オンライン）

【問い合わせ先：体育哲学専門領域　研究担当】
森田　啓　　hirakumorita@ouhs.ac.jp
髙橋　徹　　t.takahashi@okayama-u.ac.jp

事務局より

田井健太郎（群馬大学）

9 月 7 日から 9 日にかけて開催された日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会につきまして，本領域のプログラムは全て無事に終了いたしました．関係者の皆様にお礼申し上げます．会期中に開催された総会の議事録は次号の年報に掲載いたします．今年度の学会賞を体育哲学専門領域会員の林洋輔会員が，浅田学術奨励賞を髙尾尚平会員が受賞されました．おめでとうございます．なお，来年度の学会大会は，順天堂大学（2022 年 8 月 31 日～9 月 2 日）で開催されます．

また，総会において本領域の規約および規則・規程集の改正が承認されました．詳細は本専門領域 HP（http://pdpe.jp/kaisoku.html）からご確認ください．

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です．投稿を下さいます方は，広報担当：釜崎（kamasaki@meiji.ac.jp）までお問い合わせ下さい．

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

体育哲学専門領域会報第 25 巻第 3 号

発行者　日本体育・スポーツ・健康学会
体育哲学専門領域
関根正美（代表）
編集者　石垣 健二，田中愛，釜崎太（広報担当）
発行日　令和 3 年 11 月 5 日

連絡先　〒371-8510
群馬県前橋市荒牧町 4 丁目 2 番地
群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付
電話：027-220-7326

【編集後記】

会報の原稿執筆にご協力いただいた先生方，ありがとうございました．かなり久しぶりに会報の編集にたずさわりましたが，若い研究者の方々が増えて心強く思います．

ようやくコロナが落ち着きをみせ，昨日は都内のホテルで遠方から訪れた友人と食事を楽しむことができました．ところが，同じ食事会にズーム参加してもらったドイツ人の話によると，ドイツではコロナ感染者が再び増加傾向にあるそうです．日本でも安心していると，またまた緊急事態宣言ということになるのでしょうか・・・．海外との交流も含め，早く日常の生活を取り戻せるといいですね．定例研究会後の懇親会で，若い研究者の方々と膝を突き合わせられる日を楽しみにしてます．(k)